

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

京都市

○学校名

京都市立洛風中学校（平成16年 不登校生徒学習支援特区中学校として開校）

○学校のURL

<http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/rakufu-c>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】各学年1学級 【合計】3学級

「不登校児童生徒を対象とする学校に係る教育課程の弾力化」の指定を受けている

○児童生徒数

【全生徒数】42人（平成24年10月現在）

（内訳：1年生2人，2年生10人，3年生30人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

学校教育目標

仲間とともに 納得して学び直す 心を開いて遊び語り合う
自信を取り戻す学習の実践

人権教育の重点目標

教職員スタッフ自らが「人権についての理解・認識」を深めることにより，生徒の「互いの人権を守る意識や意欲」を高め，人権に関わる問題の解決に向け「行動できる態度」を育む。

人権教育の柱

- 安心して自信を持って主体的に学校生活を送れる，よりよい学習環境づくり
- 互いに認め合い，切磋琢磨して向上しようとする，よりよい集団（仲間）づくり

☆だれもが心地よい風を感じて生活できる・希望を持って登校し，笑顔で下校できる学校づくり

- ・一人一人の感じ方や考え方のちがいを認め合うこと
- ・お互いの気持ちや考えを伝えること
- ・授業を大切にすること

☆「教職員や仲間の温かな眼差しが待っていてくれる」「期待され，励まされ，支えられ，常にかげがえのない存在として認められている」と実感できる環境づくり

目指す生徒像

生徒への支援

- 主体的に生きる生徒
- 学ぶ意欲を取り戻す元気（エネルギー）の芽生えへの支援

- 自立できる生徒 ○学校から社会へ通じる道（本当にやりたいこと）探しへの支援
- 自己実現できる生徒 ○集団の中で自分を見つめる人間関係（つながり）づくりへの支援

○人権教育にかかる取組の全体概要

○本校の状況

本校は、「不登校児童生徒を対象とする学校に係る教育課程の弾力化」の指定を受けた、不登校を経験した生徒を支援するための中学校である。本校の生徒はその経緯こそ異なるがほとんどが人権侵害に関わるような辛い体験がもとで不登校を決意し、またはそうせざるを得ない状況に陥り、学校から遠ざかった経験を有している。生徒たちは一様に心のエネルギーが低かった時期を乗り越えて、もう一度学び直したいという思いで転入学してきている。

本校は、年間に春と秋（5月と10月）と転入学が2回ある。その都度、在校生徒と転入学生徒との出会いがあり、お互いに期待もあるが、緊張と不安が高まる。そんな関係を緩和するために「仲間づくり」を目的としたヒューマン・タイムを設定している。転入学生徒を迎えて、花背山の家での「オリエンテーション合宿」や「校外学習」などの取組や「秋パーティー（ミニ文化祭）」「冬らしい行事」などを積極的に取り入れている。5月には憲法学習に基づいた人権学習と12月には世界人権宣言に基づいた人権学習をプログラムしている。このように、本校では、ヒューマン・タイムをはじめ、あらゆる教育活動の中で、協力的、参加的、体験的な学習活動を意識して取り入れてきた。

○本校独自の「ヒューマン・タイム」の設置

本校では「道徳」「特別活動」に変わって「ヒューマン・タイム」という時間を設置している。（不登校児童生徒等を対象とする特別の教育課程を編成している。）

この「ヒューマン・タイム」の時間の学習を中心として人権学習につなげている。「ヒューマン・タイム」の目標

多様な体験活動と様々な人や自然との交流などを通して、人間としての生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養うとともに、豊かな心を育み、社会性の涵養を図る。

たとえば、ヒューマン・タイムの時間では話し合いやグループ活動、交流を通して様々な出会いやつながりを体験できるようにプログラムするもので、その中でいろいろと心に響く発見や出会いにつながるようにしている。

また体験的なグループ活動としては個々の「自尊感情」を育むきっかけづくりを中心に取り組んだ。体験と振り返りを重視した活動を随所に取り入れ、特に個々に自己有用感を高めて、他から必要とされていることを実感できるようにと企画したものである。

○取組の留意点と課題

本校では心のケアにあてる時間と場面の割合が多く、特定の人権問題に特化した知識理解や考察では現実の状態と内容的に遊離してしまい効果を得ることが難しい。また、いろいろな事情から、過去に集団からはずれ孤立感を味わった経験のある生徒たちが、新たな場面で集団になった時、不安や緊張からなかなかゆとりを持って「他を見る」ことができない。さらには「自己を見つめる」ことはより困難となるといえる。そのためにいろいろな取組の導入段階での意識付けや興味付けがとても大切

であり、成果を得るための重要なポイントでもある。そのため取組を企画するに際して導入部分での工夫が不十分な場合、かえって生徒のネガティブな側面が露呈してしまい逆効果となることもあった。

そのような生徒たちに、より安心を実感できる環境を整えるため、開校当初より“洛風の風”という言葉がいろいろな場で使われてきた。目には見えないけれど肌で感じられるのが“風”である。様々な“風”が吹き、感じ方もいろいろである。みんなが心地よく感じる“風”を求めて、生徒の願いから「洛風をよりよくする会」として生徒会のような活動が生まれ、みんなが安心して過ごせるためのルールやマナーが考えられてきた。その結果、生徒とスタッフによる手作りの「生徒手帳」が誕生し、平成18年度には“洛風の誓い”という宣言文となり今に受け継がれている。

このように、お互いを尊重し合える、確かな人権感覚に満ちた“洛風の風”が、学校全体に常に吹いていることが、本校の人権教育であると考えて日々の取組を進めている。

3. 特色ある実践事例の内容

実践例1 (グループワークを取り入れたヒューマン・タイムの事例)

「10リットルの飲み水を運ぶには？」(ワークショップ)と題してグループごとに分かれて話し合い、実際に水を運んでみる。

※ 条件として次の2つをクリアする必要がある。

- ① できる限りこぼさず指定された距離(30メートル)を運ぶ。
- ② 運んだ水は飲料に適していること。

その後、運んでみての感想を交流する。

『世界を変えるデザイン』(シンシア・スミス)編より「Qドラマ」という水を運ぶ道具の開発に関わるデザインの話を紹介し、どんな物をデザインし開発するにはどのような心が必要かを考えさせる。

・・・この実践を通して考えたこと

「人間は誰でも、同じ基本的要求を共有している。水、住まい、食べ物、移動手段、医療、それらを入手する機会。私たちの多くは運よく、こうした要求が満たされて当たり前と思える特権に恵まれている。でも何億という子どもや大人にとっては、まれにかろうじて満たされるにすぎない。(バーバラ・ブレミング)」・・・という言葉にあるように、世界の現状を踏まえて、『世界を変えるデザイン』の観点から物事を考えることで「意識的な問題解決」につながるようにしている。

この観点での学習方法では、人権に関しての知的理解だけに重点を置いているのではなく、体験的なワークを通して実際に体を動かすことからいろいろと感じとること(人権感覚の育成)に重きを置いている。つまり単に歴史的な事象や知識の伝達だけにとどまらないようにしている。よって、このような学習の進め方が本校の生徒の実情に照らし合わせてより適切だと考える。

そのためにも、生徒と一緒に指導者が同じ課題について試行錯誤しながら、より適切だと感じる方向へと向かっていくことが必要となる。このような考え方は、最近のアメリカやイギリスの教育界においてeducationという言葉が影を潜め、learningという言葉が多用されてきていることにもつながる。教育(education)という言葉にまともな「指導者→生徒」という一方通行的な、知識伝授のイメージを払拭し、教育を生徒の視点から捉え直し再構築するという意味で、学び(learning)というスタンスで関わりたい。生徒同士の相互作用や共同性、体験や身体性からの育ち、一人ひとりの学びかたや個々に達成されたことなどを重視する学びという視点が大切だと考える。

実践例2 (道徳の時間としてのヒューマン・タイムの事例)

『復興の狼煙』のポスタープロジェクト (B3サイズ…30枚) を鑑賞して、「私の1枚」を見つけ、そのポスターをもとにして自分の思いを発表した。そこから「有り難い」という概念について考えた。有り難い→ありがたい→ありがとう・・・この日に感じたことを大切に、具体的な答えを導くのではなく、個々にいろいろと感ずることで授業を終えた。

・・・この実践を通して考えたこと

「生きている」ってありがたい・・・この素朴だけれど温かな言葉が持つ力を少しでも感じ取ればとの思いで企画された道徳の授業となった。一般的に評価を伴う授業においては、その授業で身につけさせる力が明確でなければならないが、こと道徳においてはその授業をきっかけとして、個々の日常生活の中で「素直な物の見方や感じ方」が育まれることを目標とし、その力がこれから先のそれぞれの人生において、どこかで「生きる力」となって活かされる時がくれば良いと考える。

この「生きているってありがたい」の授業においても、できるだけ今の素直な思いや感情を大切に言葉の交流を行った。30数種類あるポスターの中から1枚だけを選ぶ行為の中から、自己の思いと対峙し目の前のポスターの中に描かれている現実に対して、真剣に向き合う様子がうかがえた。また、仲間が選んだポスターとそれに対する個々の思いの発表に際して、スタッフも一緒に選んだポスターをもとに思いを述べた。このことによって教室の中に共感と安心の風、“洛風の風”が吹いたのは言うまでもない。

4. 実践事例の実績、実施による効果

最近の人権学習講演会における生徒の感想を紹介します。

(聴覚に障害のある講師の方が、本校の校歌をとっても気に入られ手話で表現してくださり、生徒たちと一緒に歌った後の感想です)

- ・どんなことがあろうとも弱点は友や知り合いなどに助けてもらえばほとんどのことは、できるのでは？と思っています。洛風では、自分がされたくないことはしない、ということを中心に日々生活していると私は思っています。今それを心掛け、日々を大事にしています。
- ・学校の校歌を歌っているとき、教室の空気が幸せに満ちていました。先生方はそれが好きらしく今回のような勉強会をよく開きます。俺はこうゆう幸せがあるべきだと思いました。
- ・「聞こえないことが不幸ではない」という言葉に、我に帰りました。でも、他に差別やいじめをする人もいますが、私はそんな人間になりたくなし、そういった経験を受け、この学校にいます。洛風中学校はよい学校だと言ってくださり、よい勉強をさせて貰いました。

このように、ヒューマン・タイムを軸として、協力的、参加的、体験的な学習活動を意識して取り入れてきたことにより、自分自身としっかりと向き合い、仲間を大切に思い、この学校で学び、生活していることを肯定的に捉えていこうとする意識が育っている。また、単に同学年だけでなく、他の学年との間でも、モデルや支え合う良好な関係づくりにも効果がみられる。

「仲間とともに 納得して学び直す 心を開いて遊び語り合う 自信を取り戻す学習の実践」という本校の学校教育目標の具現化にもつながっている。

5. 実践事例についての評価

「生徒の役に立つ学校にしよう・お互いを尊重できる関係性を築いていこう」という考えのもと、

教育を生徒の視点から捉え直し、双方向的な教育活動のあり方の実践を試みてきた。その観点からは、ヒューマン・タイムを軸とした実践は効果を上げている。また、環境の整備も含めて、不登校を経験した生徒への関わりそのものが「人権教育」であるという考え方が、本校の教育活動の基盤となっているということも根付いてきている。生徒の意識調査等でも集団への帰属意識や安心感、規範意識の高まりもみられる。しかし、「自分に対する自信」「自己肯定感」は他の意識と比べて低い。

今後も、自分がかげがえのない大切な存在であることに気付き、よりよく自信を高めていける取組を工夫し、実践していくことが必要である。

洛風中学校 校歌

一 陽だまりのよつな 微笑と

たぐよんの優しさ あたたかな

柔らかな風が 吹く中で

友と手を取ったら 回もたてまの気がする

自分を隠さないで そのまはたけよう

風のように軽く 青空みたいに広く

自分を隠さないで そのまはたけよう

風のように軽く なりたい自分になろう

二 今はまだ夢が 見えなくても

一歩ずつでいいから 歩こう

途中で止まっても そのよみ感じ

見た経験は 大きな力になるよ

自分に負けないで あきらめず強く

心の鍵で開く 未来につながる扉

自分に負けないで あきらめず強く

心の鍵で開こう 輝く明日への扉

三 人のぬくもりと 優しさを

生きる輝きに 変えていこう

自信と勇気を 心につめて

明日の自分へ 向かって歩き出そうよ

翼を広げはばたく この広い空へ

輝く自分になる 強い気持ちを胸に

翼を広げはばたく この広い空へ

輝く自分になろう 世界に一人の君へ

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

京都市立洛風中学校

様々な人や、自然との出会いや交流を通して、自尊感情を育むきっかけづくりとすることや、多様な体験活動とふり返りを重視した活動を取り入れることで、他から必要とされていることを実感できるようにと工夫された実践事例である。

特に、生徒たちの実態に即したねらいを定め、「道徳」や「特別活動」の要素を採り入れ、不登校児童生徒等を対象とする特別の教育課程として学校独自に設置された「ヒューマン・タイム」の時間の実践内容は、一人ひとりの学びや達成度が評価され、仲間を大切に思う気持ちや、自分自身と向き合い今の自分と生活を肯定的に捉えていこうとする意識の高まりにつながっている。

また、学校目標の達成に向けた具体的な取組や教職員の意識の方向性もはっきりしていて、本来の人権教育の在り方を示した事例といえる。